

インターネットと子育て

馬場 直子

「スマホ育児」という言葉が生まれるほど、いまの若い親たちは子育てにスマホはじめインターネット機器やサービスを利用している。利用しているというよりも、かなり支配されていると感じる向きもある。もちろん、育児のために必要な情報を、本やテレビ・ラジオなどの従来型メディアから得る代わりに、インターネットで効率よく調べて活用することは決して悪いことではない。しかしネット情報は玉石混交であり、誤った情報に惑わされて、推奨できない方向へ誘導されてしまう人も少なからずいる。

いまの乳幼児の親たちは、自らが幼少期からIT機器が身近にあった世代であり、子どもにスマホやタブレットを与えることにまったく抵抗のない人が多い。外来診療の際に、子どもが泣いたりぐずったりしてちゃんとみせられないときや、子どもの声がうるさくて医師の説明が聞きづらいときなどに、おもちゃを与えるかのように自分のスマホを渡す親をよくみかける。すると子どもはいとも簡単におとなしくなり、画面に見入ったり、自分で触って画面の変化を楽しんだりしているのには驚かされるが、このようなあやし方にはやや違和感を覚えてしまう。小児眼科医によると、スマホやタブレット利用の若年化に伴って、早い時期から子どもの近視が進んでいるとの警鐘を鳴らしている。子どもはスマホやタブレットを触ってすぐに反応が返ってくことに面白さを感じるので、このようなタンジブルメディアと呼ばれるものに引き込まれてしまうらしい。睡眠・食事・入浴などの生きて行くうえで必要な時間を除けば、子どもが1日に自由に使える時間は5～6時間程度といわれているが、その中で身体を動かして外遊びをしたり、絵本を読むなどの従来型の遊び時間を削って、こうしたメディアとの時間にあててしまうことは、心身の発達にとって有害ではないかと危惧されている。

もちろんインターネットは便利だし、効率的な情報入手に不可欠となってきたことは否めない。外来診療でも、子どもの疾患に関してあらかじめインターネットで調べてきてすでに理解が進んでいて説明が伝わりやすいこともあるし、何より有難いのは皮疹の経過を画像でみせてもらえる点である。生まれてすぐや数年前、数日前の皮疹の様子を克明にスマホに撮っていてみせてくれることが診断に役立つこともある。しかし、一方で誤った情報に惑わされてしまっていて、軌道修正するのにひと苦労し、かえってマイナスになっていると感じるときも少なからずある。

このように功罪両面あるインターネット情報であるが、メディアを上手に活用しながら育児を楽しみ、決して支配されないように気を付けてと、自分の息子や娘の世代である若い親たちに諭すことが多くなった昨今である。